



学校だより

令和 8 年 1 月 吉日
上越市立有田小学校
校長 野田 晃

「あいさつ」ができないのは

先週、ありペンたーペン集会がありました。1月の「なかよし目標」は「明るいあいさつを伝え合おう」です。あいさつゲームをしたり、今までのあいさつ運動を振り返ったりしました。

とても嬉しかったのは、1年生から6年生のなかよし班でゲームをしたり話し合ったりしたとき、どの班もとても仲良く楽しく活動していたことです。高学年がとても優しいのです。どの子も仲良くしようとしているのです。みんな笑顔なのです。そして、話の聞き方も大きく変わりました。長い話でも、口を閉じて集中して話を聞くことができる子ばかりになりました。大切なことをしっかりと学ぼうとする姿勢ができてきています。みんなのために、自分勝手に話したり騒いだりしない態度が身に付いてきたのだと思います。

4年前、私が有田小学校に赴任したときはコロナ禍だったので、全校集会をしたり縦割り班で活動したりすることができませんでした。その後、コロナが収まり縦割り班等で集まってみると、悪口を言われたり、からかわれたり、暴力を振るわれたりするトラブルがよく起こりました。また、全校集会で子どもたちに話をするときには、話を聞いていない子が多く、友達と勝手に話したりふざけたりする子がたくさんいました。友達や先生など周りの人たちの気持ちが分からず、自分のしたいことを優先させてしまう子が多かったようです。さらに、先生の話をしっかり聞いて、自分の成長のために学び取ろうとする気持ちも少なかったのだらうと思います。あれから4年。「立派になったなあ」「成長したなあ」「有田小の子は素晴らしいなあ」と思います。全校集会での子どもたちの瞳の輝き、堂々とした姿勢を見て、とても凛々しく感じます。

ところが、です。「あいさつ」だけは、まだしっかりとできない子が多いのです。大きな声で元気よくあいさつできる子は数えられるほどです。進んであいさつできる子もそれほど多くありません。友達や先生からあいさつをされたらあいさつを返す子どもは増えてきました。目を合わせて会釈をする子どもも多くなってきました。しかし、直東学園で推進している「あいさつ日本一」には、ほど遠い状況だと思っています。保護者や地域の方々からも「あいさつをする子が増えてきた」というご意見はありますが、「ほとんどの子があいさつをしない」というご意見もいただいています。子どもたちは、あいさつの仕方を知っています。あいさつの大切さもたくさん学んできました。国語や算数等の勉強よりも、あいさつをすることの方が簡単そうです。しかし、できない子が多いのです。なぜでしょうか。

おそらく、子どもたちにとって「あいさつはしなくても困らないこと」なのかもしれません。あいさつをしなくても友達はあるし、お家の人は優しいし、先生や地域の人から叱られることもありませんから。また、あいさつをすることは、みんなの前で自分を表現する行為です。大きな声を出せば目立ちます。みんながあいさつをしていない中であいさつをするには勇気が必要です。あいさつしても、あいさつを返してもらえないこともあります。嫌な気持ちにもなります。だから、あいさつをしない方が「楽」だと思ってしまうのかもしれません。自らあいさつすることは、私たちが思うよりも、子どもにとって大変なことなのだと思います。大きな心の成長が必要なのだらうと思います。

しかしながら、あいさつは子どもたちに身に着けてほしい大切なスキルです。人とよりよい関係を築くための第1歩です。学校や社会で受け入れられ信頼されるための所作です。心と心がつながる機会です。これからも、あいさつすることの大切さを伝え続けるとともに、私たちから爽やかなあいさつを子どもたちにすることで、あいさつすることのよさを実感してほしいと願っています。